

令和元年9月3日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05170

研究課題名(和文)南アジア農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のためのNGOとの共同研究

研究課題名(英文) Collaborative Research with NGO with a view to improve reproductive health of villages in South Asia

研究代表者

松岡 悦子 (Matsuoka, Etsuko)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：10183948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：バングラデシュのMadaripur DistrictのKhalia村とGobindapur村の512世帯に、世帯員の年齢、未既婚の別、所有財産、マイクロクレジット、妊娠・出産・産後の経験、男女の時間利用と地理的移動について質問紙調査とインタビュー調査を実施した。その結果、バングラデシュ農村部は海外出稼ぎによって大きく変貌し、クリニックや病院が増加し、女性たちの妊娠・出産は大きく医療に依存するようになっていた。したがって、リプロダクティブ・ヘルスを改善するには、女性たちが自分の身体を知り、妊娠・出産の知識を持つことが重要であり、NGOはそれの手助けをすることができるであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バングラデシュを始めとする低所得国のリプロダクションについては、これまで医療へのアクセスが限られていることが問題視されてきた。だが、今回の調査によれば、医療はむしろ無秩序と言えるほどに村に入り込み、女性たちのリプロダクションを急激に医療化し、帝王切開による健康被害や回復の遅れをもたらしていた。海外送金による金銭的余裕がその背後にあり、土地所有、学歴、海外出稼ぎ、クリニックでの出産、帝王切開は正の相関関係にあった。低所得国と医療との関係は大きく変化しつつあり、NGOは医療を提供するだけでなく、女性が医療を見極める目を持てるように支援する必要がある。

研究成果の概要(英文)：Both questionnaire survey and interviews were conducted to 512 households at two villages, Gobindapur and Khalia, in Madaripur District, Bangladesh. Questions such as household members' age, marriage status, property ownership, microcredit, reproductive experiences, time use and geographical movement for both men and women were asked. Results show that Bangladeshi villages are undergoing extensive changes due mainly to remittance from overseas work. Medical facilities such as private clinics are increasing each year bringing about medicalization of pregnancy and birth in both villages. In order to improve women's reproductive health, it is important that women should know their own bodies as well as increase knowledge on reproduction. NGO will be able to support women by giving more information and knowledge on their own reproductive bodies.

研究分野：文化人類学

キーワード：バングラデシュ リプロダクティブ・ヘルス NGO 母子保健 マイクロクレジット ジェンダー健康 医療

## 1. 研究開始当初の背景

バングラデシュ農村部では、妊産婦死亡率や新生児死亡率の高さから、リプロダクティブ・ヘルス改善のためにより多くの医療を投入することが目指されてきた。だが、2000年頃には都市部における出産の極端な医療化が進み、50%を超える帝王切開率と女性の出産への満足感の低下が生じていた。このような都市部と農村部の格差と、次第に農村部へも浸透しつつある医療化は、さらなる医療の投入が女性の健康改善にはつながらないことを予想させた。むしろリプロダクティブ・ヘルス改善のためには、ジェンダー平等や女性のエンパワメントを実現し、伝統的習慣や生活スタイルを変えるなどの生活全般の近代化を図る必要があると思われた。その際バングラデシュにおいては、NGOが実質的に大きな役割を果たしていることから、本研究では代表者が1990年代半ばから関わってきたNGOであるGUP(Gono Unnayan Prochesta)を調査のパートナーとして、研究を開始することとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、単に母子の死亡率を減少させるだけでなく、女性自身が満足いく妊娠・出産を経験するために、ジェンダー平等や経済的安定、教育の充実などの生活全般の向上をもたらす道筋をNGOと共同で探ることを目的とした。その際、彼らの活動をモニタリングし、NGOが女性にどのような影響を与えているかを調査し、リプロダクティブ・ヘルスの改善のためにNGOができる支援を共同で考えることを目指した。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査計画

調査地は、ダッカの南西約70kmに位置するMadaripur県のRajoir Upazilaである。当初の計画では、GUPの活動地域で、村の女性たちの行動の観察や女性たちへの聞き取り調査を行い、それぞれの専門分野から得られた結果をまとめる予定であった。初年度の2015年9月にそのような実地調査を行った直後、2015年と2016年にバングラデシュで日本人が殺害される事件が複数回生じ、バングラデシュへの渡航が制限された。そこで2016年度以降、現地の調査協力者を得て、質問紙とインタビュー調査をGUPの協力のもとで実施した。

### (2) 調査方法と内容

現地の調査協力者として、文化人類学の教育を受けたNurul Islam Biplob氏(男性)とSelina Akhter氏(女性)をメンバーに加え、バングラデシュ側と合同の研究会を日本とバングラデシュで合計5回開催した。調査地をRajoir UpazilaのGobindapur村とKhalia村の全世帯(約500世帯)とし、質問紙をモジュールA~Eまでの5種類作成した。( )内は担当者。

- A: 世帯メンバーの年齢、職業、結婚年齢、学歴、所有財産、NGOへの参加の有無など(全員)
- B: マイクロクレジットの利用状況、借入額、借り入れの理由など(青木美紗)
- C: 妊娠・出産・産後・避妊の経験、出産の儀礼など(五味麻美、松岡悦子)
- D: 産後の健康や不調とそれへの多様な対処法(嶋澤恭子)
- E: 1日の時間利用と地理的移動(浅田晴久)

質問紙は英語で作成し、ベンガル語に翻訳して用いた。インタビュー調査については、質問紙調査の結果をもとに聞き取りをしたい人を選び、B~Eのモジュールに加えて、児童婚につ

いてのインタビュー（モジュールCM）を追加した（合計73人）。さらに、同意を得られた人にGPSを装着してもらい、空間移動の調査を実施した（11人）。

#### 4. 研究成果

##### (1) 村の全般的特徴

2つの村とも世帯主の3～4割が農業に従事しており、Gobindapur村では97%がムスリム、Khalia村ではヒンドゥーが47%を占めるという違いがあるが、以下では両村を合わせて考察を行う。全世帯を土地所有の大きさに応じて5段階に分けると、階層が上の世帯ほど平均月収が多く、世帯人数が多く、教育年数が長く、世帯から海外出稼ぎに出たことのある人の割合が多かった。また階層が高いほど、テレビ、ラジオ、コンピューター、自転車の所有率が高く、息子、娘とも教育年数が長くなっていた。これらのことから、土地所有による階層分類は現在も有効であり、また海外出稼ぎによる送金が世帯収入に大きな貢献をしていることがわかった。

##### (2) マイクロクレジット

この地域では2006年以降マイクロクレジットに参加するNGOが増え、融資する機関の増加につれて女性たちの借り入れ回数と借入金額が増え、2012年以降は急激な借入回数の増加が見られた。また、女性たちは借りたお金を元手に起業しているとは限らず、家の修繕や他のローンの返済、夫の仕事や子どもの教育や結婚資金のために融資を受けていた。インタビュー調査によると、利用者の多くが事業の収益ではなく、他の家族の収入を借り入れの返済に充てていた。また村の人々にとって、NGOが医療や教育サービスを提供する機関ではなく、銀行や高利貸しと並ぶ金融機関と見なされるようになっていた。

##### (3) 児童婚

2つの村では、児童婚に相当する18歳未満の結婚が76%を占め、20-24歳の若い世代においても78%が18歳未満に結婚していた。児童婚をしたグループと児童婚でないグループを比較すると、死産または子を亡くした経験は児童婚をしたグループに多く、教育年数は児童婚をしていないグループの方が長かった。児童婚をした女性の中には、もともと付き合っていて恋愛結婚をした人と、親や兄の取り決めに従って結婚した人がいた。インタビューに答えた全員が、自分の娘には教育を受けさせ18歳になってから結婚をさせたいと答えていた。

##### (4) 妊娠・出産

Rajoir Upazilaでは、公的なヘルスサービスは2012～2015年の間に50床と変化がないにもかかわらず、プライベートクリニックの数はこの間に31床から72床へと大きく増加していた。2015年以降の出産場所の37%がクリニックで、家での出産割合は6割に減少し（図1）

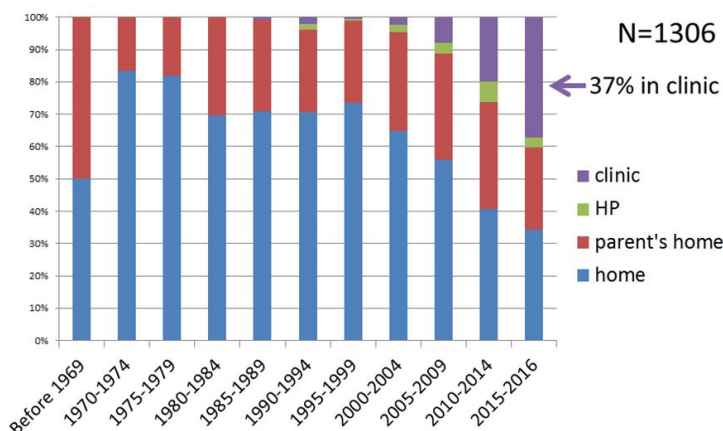


図1 出産場所の変化

2015年以降の介助者は医師が50%、SBA（Skilled birth attendant）が40%となり、帝王切開が27%となっている。このような変化が女性たちの出産経験にも影響している。たとえば、自分や親の家で出産した女性ほど出産を良かったと評価し、病院やクリニックで産んだ女性ほど

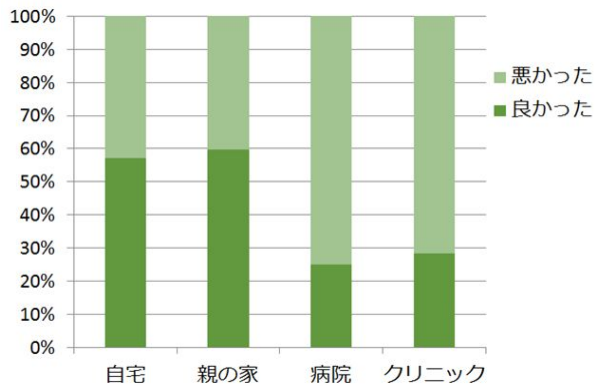


図2 出産場所と出産の評価

ど悪かったとする割合が高くなっている(図2)。また、帝王切開で出産した女性はそうでない女性より出産を悪かったとする割合が高く、母乳をやる日数は、出産を良かったと答えた人の方が有意に長かった。また、教育年数が長く、月収が多い人ほどクリニックや病院で産み、帝王切開を受ける割合が高くなっていた。以上のことから、妊娠・出産が医療のもとで行われ

る割合が高まっているものの、そのことが女性の健康や満足感に結びついていないことがわかる。

### (5) 産後の女性の健康

出産後1年未満の女性に健康状態について質問紙とインタビュー調査を実施したところ、産後1か月以内に3割以上の女性が4つ以上の健康問題を抱えていた。多い問題は下腹部痛、頭痛、めまい、性器出血、発熱、腰痛であり、その原因について、女性たちの答えで多かったのは「わからない」と「重労働」であった。また身体の不調に対する対処として、「何もしない」と答えた割合が最も高く、病院やクリニックに行くのには夫の決定が必要とされていた。産後の休養に関して、女性たちは実の親や義理の親、姉妹たちの世話を受け、比較的長い休息期間を確保していた。

### (6) 女性の行動圏の変化

農村の急速な経済的発展にもかかわらず、女性の行動圏は依然として屋敷地の内部が中心であった。また女性が外に出ることは、貧しさや夫の不在というネガティブな評価とも結びつき、必ずしも女性のエンパワメントととらえられてはいなかった。GPSによる男女のモビリティの比較では、屋敷地を離れている時間が男性の平均が401分に対して女性の平均は95分であり、家から最も離れた移動距離の平均は、男性が2.8キロに対して女性は619メートルと、男女で大きな開きがあった。またNGOとの関連では、NGOの活動期間が長くなるにつれて、隣家の住民との会話、薪の収集、牛の世話、農作業などの戸外で行う活動をする割合が増えていた。女性のエンパワメントをモビリティの高まり、行動の自由という尺度で一律に測るのではなく、その文化や実情に合わせた測り方を検討する必要があるだろう。

以上のことから、バングラデシュ農村の状況は2010年以降大きく変化し、海外送金の流入による一部の住民の生活レベルの向上が、全体の金銭の流通を増加させ、マイクロクレジットの利用を高めているようであった。そしてプライベートクリニックの増加によって、女性の妊娠・出産経験は急速に医療によるものへと変化していた。だが、クリニックで帝王切開を経験した女性たちは、心身の不調、回復の遅れ、家事労働にすぐに戻れないこと、費用の高騰を訴えており、医療化が女性たちの出産経験をプラスに変えているわけではなかった。以上のことから、リプロダクティブ・ヘルスを守るには、女性たちが自分の身体や正常な出産のプロセスについての知識を増やし、医療を取捨選択する力を持つことが必要と思われる。また、助産師やSBAによる介助が出産に対するプラスの評価と結びついていることから、NGOはSBAと助産師の養成を支援し、女性たちへの教育支援を行うとともに、女性の人権を中心に据えたりプロダクションに関する情報を伝える必要がある。

## 5.主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

松岡悦子「リプロダクションとアジアの近代化」『家政学研究』Vol.65 No2、2019 年 3 月 p. 5-7、査読無。

浅田晴久「講演録 バングラデシュ農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のための NGO との共同研究 - アンケート調査の分析からみる農村女性の実態 - 」、『女性学評論』32、199-217 頁、2018 査読無。

嶋澤恭子：ラオスにおける思春期のリプロダクティブ・ヘルス,(特集)リプロダクティブヘルスからみたアジアにおける思春期の健康教育,思春期学,35(4)：361-166(2017)査読無。

〔学会発表〕(計 16 件)

Matsuoka, E., Gomi, M., Asada, H. and Shimazawa, K., “Empowerment and Reproductive Health of Women in Rural Bangladesh: Based on a Collaborative Research with NGO” jointly organized by Department of Anthropology, Dhaka University. 13th September, 2018.

松岡悦子、五味麻美、青木美紗、嶋澤恭子「ラウンドテーブル・バングラデシュ農村におけるリプロダクティブ・ヘルス改善の道筋を探る」『国際ジェンダー学会』2018 年 9 月 1 日 聖心女子大学

松岡悦子「アジアの出産を見る - ジェンダーの視点から」『東北並びに女性視角研究検討会』大連外国語大学 11 教 B 区 301 室、中国、2017 年 12 月 23 日

松岡悦子「地域に根付く伝統や風習が健康格差に与える影響 - リプロダクティブ・ヘルスを例に - 」『グローバルヘルス合同大会』日本国際保健医療学会 東京大学医学部 11 月 26 日、2017 年

松岡悦子「グローバルヘルスとアジアの出産」『全南大学校日本文化研究センター 第 12 回国際学術シンポジウム』全南大学校日本文化研究センター、韓国、2017 年 11 月 7-8 日

青木美紗「バングラデシュ農村部における女性の生活変容に関する一考察 マイクロレジット利用実態の観点から」日本家政学会関西支部第 39 回研究発表会、同志社女子大学、2017 年 10 月 15 日。

浅田晴久、「バングラデシュ農村部におけるリプロダクティブ・ヘルス改善のための NGO との共同研究 - アンケート調査の分析からみる農村女性の実態」神戸女学院大学女性学インスティテュート主催第 1 回女性学研究会、於神戸女学院大学、2017 年 6 月 23 日。

松岡悦子「文化人類学から見たアジアの出産」埼玉医科大学学術集会 2016 年 8 月 22 日  
Matsuoka, E., Giving Birth in Changing Asia and its Implications on Women's Health. Leuven Catholic University, 18th Nov. 2015. 日本学講座

Matsuoka, E., How do women give birth in Asia? And what can we learn from them? 台湾大学 2015 年 10 月 5 日、台湾生産改革行動聯盟主催

Matsuoka, E., Reproductive Health in East Asia: Impact of Medicalization on Women's Health. In the panel titled "Women's Experience of Reproduction in East Asia. East Asian Anthropological Association, 2015 Oct 3-4, College of Social Science of National Chengchi University, Taiwan.

松岡悦子「アジアの女性たちは、今どのように産んでいるのか」『アジアのお産事情を知る』日本助産学会・国際委員会主催講演会、聖路加国際大学本館 302 教室、2015 年 6 月 13 日  
Kyoko SHIMAZAWA, Aspects of Medicalization of Childbirth in Laos: “Kho Pat”, ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, 2015.7. Yokohama

〔その他〕

科学研究成果報告書『南アジア農村部におけるリプロダクティブ・ヘルスをめぐる NGO との共同研究』松岡悦子、嶋澤恭子、五味麻美、浅田晴久、青木美紗、2019年3月 PDF 掲載  
<https://reproculture.files.wordpress.com/2019/05/e585a8e4bd93.pdf>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：浅田 晴久      ローマ字氏名：(ASADA, haruhisa)

所属研究機関名：奈良女子大学      部局名：人文科学系

職名：准教授      研究者番号(8桁)：20713051

研究分担者氏名：青木 美紗      ローマ字氏名：(AOKI, misa)

所属研究機関名：奈良女子大学      部局名：生活環境科学系

職名：講師      研究者番号(8桁)：50721594

研究分担者氏名：五味 麻美      ローマ字氏名：(GOMI, mami)

所属研究機関名：川崎市立看護短期大学      部局名：その他部局等

職名：講師      研究者番号(8桁)：70510246

研究分担者氏名：嶋澤 恭子      ローマ字氏名：(SHIMAZAWA, kyoko)

所属研究機関名：神戸市看護大学      部局名：看護学部

職名：准教授      研究者番号(8桁)：90381920

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：Nurul Islam Bipob

研究協力者氏名：Selina Akhter

研究協力者氏名：Gono Unnayan Prochesta

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。